

## 中国伝統医学と道教(第36回) 平田篤胤(I)

吉元 昭治

吉元医院

前回総会で道教研究者先人の一人として平田篤胤を挙げたが、今回は彼の業績の一つでもある医師としての面をとりあげ、道教研究者としての業績は次回にふれたい。この抄録を書いているとき、期せずして坂出祥伸先生の『江戸期の道教崇拝者たち』の発刊があり、大いに参考にさせていただいた。

平田篤胤の集約としては、『平田篤胤全集』があるが、筆者の書架には次の3種があった。

- (1) 平田篤胤全集, 平田篤胤全集刊行会, 明治44年(1911), 昭和5年11月改訂(1930), 改版
- (2) 平田篤胤全集, 内外書籍, 昭和6年8月(1931)
- (3) 新修平田篤胤全集, 名著出版(21冊), 昭和50年11月(1975)

本発表ではテキストとして(1)を用いたが,(3)の全集は21冊(1~15冊, 補遺5冊, 別巻1)で、内容は古史・神道・道教, 附神仙, 儒道, 仏道, 天文, 曆術, 度制, 医道, 歌道, 古道入門, 外事, 気吹舎門人等に分かれ、彼の広い研究分野を知らされる。

平田篤胤は荷田春満, 賀茂真淵, 本居宣長の学説をうけ世に4大人といわれ、幕末より明治初期に大きな影響があった。安永5年(1776), 秋田に生れ、気吹之舎(きふきのや)と号し、20才頃江戸に、25才で松山藩, 平田篤穂の養子となる。享和元年(1801), 本居宣長(鈴の屋と号す)に傾倒し、師事しようとしたがその9月、宣長は死去する。しかしその後も国学(神道を主体)に励み、その主旨は懐古的な古道ともいわれるものであった。一方では儒・仏道を強く排撃した。そのため、各方面から反撥をうけることになる。享和・文化・文政・天保年間にかけて、神道は勿論、道教、医学等の筆をふるい、その数数百巻に近い。66才(天保12年, 1842), 筆禍にからみ、江戸より追放され故郷秋田にもどり、天保14年(1843), 68才で死去する。弟子に佐藤信淵などがいる。

篤胤は神道を信奉すると共に、深く精神的世界にも没入し、異境、幽境、神仙といった処も追求し、道教に関する著述も多い。神道には室町末に、京都吉田神社祠官、卜部兼俱が主唱した、吉田神道(卜部神道)があるが、この教義は神道を中心とし、儒仏道の調和をも試みているのに似ている。

以上をふまえて、本題の医師としての姿をみてみたい。その医学的著書は、『医宗仲景考』『金匱玉函経解』『志津能岩屋講本』(別名、医道大意)などがある。志津能岩屋とは「静の岩屋」というと、鳥取県米子市彦名町の粟嶋神社(少彦名命を主神)境内にある八百比丘尼は伝承のある岩窟である。今回はこの「志津能岩屋講本」についてのべたい。

本書は篤胤の口述をもととして、弟子が筆記したもので、内容は易しく書かれ、当時の会話調になっている。その序文で弟子の書いた処では「初め師は医師として活躍したが、次第に神道に没頭していった」とある。医書としては、彼が国学者で復古主義者であり、また当時、医療の世界に古方派が主流であった事を考えると納得はいく。

この書は医師としての心掛けを説いているが、それには神道による心の支えが重要ととく。陰陽説もその陰陽を動かしているのは神であり、医師としては40~50才頃が最も良いといい、自分の経歴と照り合せている。今の世に真の医者少なく盗人医者が多いと、同業者に向ける目もきびしい。これらの点をふまえて総会で発表したい。